

Design for Survival : Shelter and Clothing Manufactured by Shoichi Yokoi

SABAE Hideki

This article examines the “things” manufactured by former Japanese soldier Shoichi Yokoi (1915-97), who returned 28 years after the end of World War II. Of Japanese holdouts, Yokoi was the only survivor who returned to Japan with their own products. They had been just regarded as evidence of his “dexterity” or “indominable spirit”, but this paper tries to consider them from a technical and cultural point of view by regarding them as an excellent result of design.

In the extreme state of life in the jungle on Guam Island, Yokoi’s unique “knowledge” has produced these tools, and they are thought to have made his survival possible. In order to clarify this, this paper focuses on his own shelter (Yokoi Cave) and clothes. Surprisingly, the former had a “sewage pipe” and the latter had a “collar”. We explore the source of the “details”, which were not entirely necessary, in his personal experience and the historical background before the World War II. As a result, this paper highlights one aspect of Japan’s “national memory” that Yokoi’s “things” should contain.

生存のためのデザイン——横井庄一の家と衣

鯖江秀樹

はじめに

テレビジョンでしょう。内地にいたとき、そんなものが出来たという話を聞いたことがある〔朝日新聞朝刊、一九七二年一月二六日〕。

京都精華大学紀要 第五十三号

一九七二年一月二十四日、旧日本軍陸軍軍曹、横井庄一（一九一五—一九七）がグアム島現地住民によって保護された。翌日夜に開かれた会見は、横井本人が記者の質問に答える形で進められた。冒頭の科白は、「（テレビを指差して）これが何かわかりますか？」

という質問への返答である。「否」という答えを期待した、いかにも好事家めいた問いではあるが、よく考えれば驚くべきことではないか——二十八年もの歳月をグアムのジャングルで過ごし、しかも共同生活を送った仲間を失った後、約八年のあいだ、会話することはおろか、ほとんど声を発することさえなかった人間が、初めて見る実物のテレビ受信機を過去の伝聞を照らし合わせて、これほどの確な答えを発したとは。

横井庄一の発見は、「もはや戦後ではない」という一九五六年の『経済白書』に記された言葉がすでに色褪せ、急速な近代化による公害問題や学生運動、ベトナム戦争などが情勢を大きく揺るがした一九七〇年代の日本に大きな衝撃を与えた。帰国後も大々的な報道が続き、有名なセリフ——恥ずかしながら帰って参りました——はその年の流行語大賞にも選ばれている。こうしたワイドショー的なフィーバーが優勢だった当時、冒頭で紹介した横井の第一声を冷静に判断できる者は決して多くはなかっただろう。いま捉え返すのなら、意表を突くあの応答からひとまず察しうるのは、横井が驚くべき記憶力の持ち主だったのではないか、ということである。

もうひとつ、横井生還にまつわる事実として、あまり知られていないことがある。それは、一万人とも推定される「残留日本兵」のなかで、横井だけが唯一、当地で実際に用いた生活用品とともに故国に帰ってきた、ということである〔林 2012: 111〕。調理道具、指物や漁具などを含む、手垢と土と煤にまみれた横井の制作物はそれ特有の生々しさを宿している。それらの多くは現在、「横井庄一生活資料」と題したコレクションとして、横井の故郷名古屋市の市立博



図1：長袖上衣、丈73.6cm、衿63.5cm、袖口15cm、パゴの繊維製、木製ボタン付、名古屋市博物館蔵（2018年5月 筆者撮影）

物館に収蔵されている〔名古屋市博物館 2015〕。

コレクションのなかでとりわけ目を惹くのは、横井が制作し実際に着用していた衣服である【図1】。横井は仕立屋を生業としていた。単純に考えれば、内地で培った加工技術が、自作の服に生かされただけなのかもしれない。しかし、いかに高い技術があろうとも、それだけで精巧緻密な布を織ることができるとは限らない。筆者は、名古屋市博物館の企画展「博物館イキ」（二〇一八）にてコレクションの一部を実見する機会を得たが、展示された事物の存在感に思わず息を呑んだ。それだけの出来栄えの事物を生み出すには、当たり前のことだが、適切な道具、作業場、時間、そしてなにより材料が欠かせない。敗残兵搜索の手を逃れながら、それらすべてをいった

いどうして揃えることができたのか。

本論文には二重の目的がある。第一に、横井の稀有な制作物（後述する「横井ケイブ」を含め、以下では「モノ」と呼ぶ）をとくに素材と製法という点から分析する。それによって、二八年にも及ぶ亜熱帯の孤島での潜伏生活が、横井独自の「モノ」の生産能力に支えられていたことを明らかにする。換言すれば、この第一のテーマは、生活に利する「モノ」に即した実証的な考察となる。

第一のテーマと連動させつつ、それとはやや異なる水準で検討を進めたいのが、副題に挙げた横井の「家」と「衣」のそれぞれの細部、すなわち、前者の「水洗式便所」、後者の「襟」である。両者は過酷な潜伏生活にあつて、必需品ではない。水洗でなくても用を足すことはできる。襟がない服でも生活に支障はない。この点で、先述の第一のテーマとは大きく異なる問題が含まれていることがわかる。「用」を満たすという目的を欠いた細部（水洗と襟）がなぜそこにあるのか。このことを問うことが本論文の第二のテーマである。

これらふたつのテーマを論じるために、横井の自伝『明日への道』（一九七四）の「モノ」の制作に関わる箇所、すなわち横井の記憶それ自身が重要な鍵を握ることになる。ではなぜ、こうした「モノ」と「記憶」に依拠した考察が求められるのか。研究の背景を述べておこう。

横井庄一については、(ゴシップ的な記事や雑誌特集などを除くとしても) 帰国後の健康調査に基づく簡単な報告(大磯 1972)を例外として、その大半が彼の帰還を昭和ないしは戦後日本を象徴する「事件」として記述し、日本近代史研究の文脈で言及してきた(五十嵐 2012、林 2016、山口 2003)。注意すべきは、横井を語るその論調であろう。「天性の強さ」、「すさまじい生命力」、「驚異の知恵」、「孤独に耐えた精神力」など、精神的な語彙で、横井の生は語られてきた。その忍耐力や精神力の根拠は、「生きて虜囚の辱めを受けず」と説く「戦陣訓」(一九四〇)に探られることもあった(松本 1972)。その反面、横井を介して現代社会のあり方を反省しようとする社会評論的な論説も当初から多く書かれてきた(花森 1972)。多くの戦争経験者(復員兵)が存命であったこの時代にあつて、横井に対する捉え方がかくのごとく感情的になつてしまふのは仕方ないのかもしれない。ただ、だからといって横井生還という「奇跡」を、精神論だけで理解しようとするのはあまりに偏つた見方だろう。そういう傾向に抗つて、本論文はあくまで事物、すなわち「モノ」に依拠する。それによつて横井の生存のありようを理解する初の学術的な試みである。したがつて本研究は、デザイン史、あるいは広く物質文化史といった領域に位置づけられる。

本論文の構成を確認しておこう。次章では、「モノ」への具体的な検討に取りかかる前に、横井が二十八年間を過ごした「環境」を

明らかにする。ただしここで言う「環境」とは、気候や自然条件のみを指すのではなく、むしろ人工世界を含む「生活圈」を意味している。本章ではそれを構成する要素のなかでも、横井にとって切実だったと考えられる四つの生存条件——「潜伏」、「湿気」、「道具」、「材」——を、自伝『明日への道』の記述に沿つて確認する。

続く第二章では「家」を考察する。横井はグアムでの潜伏生活のなかで、仮設小屋(ランチョ)や、地面に穴を掘つて設えた地下住居を多数制作した。そのうちもつともよく知られるのが、発見前のおよそ八年間を過ごした最後の地下住居、通称「横井ケイブ」である。このケイブは現存しないが、旧通産省職員の実測調査に基づく側面図が残されている【図2】。この図をもとに本章では、制作者本人が「横井式水洗便所」と呼んだ下水処理装置の由来を明らかにする。水洗式トイレが日本全国に本格的に普及したのは、一九六〇年代以降のことであつた。横井の水洗便所はいわば時代を先取りした設備だったとも言える。なぜそれが可能になったのかを横井の証言を手がかりに検討する。

第三章では「衣」を考察する。厳しい条件下で制作された衣服のうち、特に注目したいのが素材と形態である。驚くべきことに、横井はパゴ(ハイビスカスの一種)から繊維を抽出することに成功した。植物由来の繊維から布を織り、それらを丁寧に縫い合わせたのが、先に紹介した上着である。その制作のために、(原始的ではあ

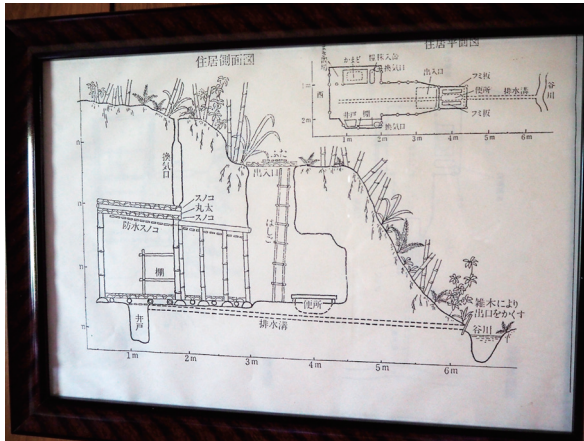


図2：「横井ケイブ」側面図（旧通産省作成）、横井庄一記念館（2018年5月 筆者撮影）

るものの）生産工程さえもが確立されていたという。見逃しがたいのは、繊維そのものの製造という、内地では未経験の領域に横井が果敢に挑戦したことであり、その技法が結果的にはきわめて合理的なものだった点である。だからこそ、身体のプロtectionや体温の維持など、生存に必須ではない（目的を欠いた）「襟」は慎重に考察すべき対象となる。実のところ、「襟」は横井本人が自覚しなかった服飾文化の記憶——「国民服」の記憶——を内包しているのではないか。本章を通じて、この仮説を立証したい。

「おわりに」では、各章での論証を振り返り、横井の「モノ」と戦間期日本の物質文化との対応関係を明らかにする。結論を先取りするならば、横井の衣や家は、彼個人の技量や発想の産物であると同時に、いや、それ以上に（戦後

を生きるわたしたちがどこかで置き去りにした）戦時日本の知や記憶の具体的表明だと考えることができる。

第一章 生存の条件——グアム島の「環境」

横井の「モノ」を考察するうえで、まず確認すべきは、彼を取り巻いていた「環境」である。それは横井の生を厳しく制限していた。なかでも重要だったと判断されるのが、潜伏、湿気、道具、材という四つの条件である。それぞれが何を意味するのか、横井の回想をもとに確認しよう。

潜伏という条件

四つの条件のうち、もっとも根本的なのが「潜伏」である。「戦陣訓」の定める投降捕縛の辱めを、横井は断固避けようとした。終戦後も、米兵や現地住民の搜索の手から逃れることを行動の第一原理とした（だからこそ、彼は決して現地の村落を襲撃したり、食料を略奪することがなかった）。

とはいえ、人が生活を送るとは、（いかに僅かであっても）その痕跡を残すことを意味する。歩けば足跡がつき、野営は焚火の跡を残す。この痕跡をその都度できる限り消去することに、横井はきわ

めて敏感であった。『明日への道』には次のような一節がある。

夜が明けるか明けぬうちに、我々の昔いたタロホホ川の川べりのあたりで現地人の声と激しい銃声が聞こえました。我々は驚いて夢中でその場をとり片付け、身を隠す場所を探してうろうろしました。

手近に目についたヨシやぶの奥深くに身を隠すことを互いに目と目で合図して、先頭の一人が身軽に道をわけてすみ、二人目は二人分の荷物を持ち、最後のひとり後は後の道を敵にわからぬように後始末をしながら、身の丈以上のヨシをかきわけかきわけ歩きました〔横井 1974 : 133〕。

この用心ぶりは、ジャングルでの抗戦のために数名の部下と行動を共にして以来徹底された。前の引用は、終戦から二年後、一九四六年当時の状況を回想したもののだが、その後「敗残兵狩り」が次第に下火になっていった時期も「後始末」、すなわち偽装Ⅱカモフラージュは続けられている。無論、食べ物を求めて活発に動き、行動範囲を広げれば広げるほど、ますます痕跡の消去に勤しまねばならない。そのため、偽装に対する煩わしさは、横井一行の行動を厳しく制限することになった。この臆病とささえいえる慎重さは、たびたび起こった仲間との不和の原因だったのではないかと推察される。

湿気という条件

敵に見つからないように生きのびるために、生の痕跡を消去するという煩わしい仕事は、必然的に「モノ」の制作を遅らせることになるが、他方で、制作を急がせるような環境がグアム島には存在した。それが亜熱帯の気候であり、とりわけ横井を悩ませたのが「湿気」である。横井一行には、偵察の際、持ち物を包み木の枝のあいだに隠す習慣があったという。

約一週間をランチョを組む場所選びに歩き回って費し、もとのランチョへ帰ってみると、木の枝に吊しておいたわたしの持ち物は、スコールのせいか夜露のせいか湿気を通してしまっていて、主として着替えの衣類は全部腐ってしまっていました〔横井 1974 : 134〕。

たとえば湿気を含む大気が大雨をもたらせば、潜伏者の痕跡は洗い流されるという利点はある。「スコールがくる時は、土の上を避け、草の上を歩きます、雨水が我々の草につけた泥を洗い流してくれるからです」と横井も証言する〔横井 1974 : 101〕。しかしながら、生活必需品は、金属類を除けば瞬く間に湿り気を帯び、有機物はハエの餌食となり、分解されていく。したがって、たとえば食物を一

度に大量に確保し、備蓄することなど（横井は川エビの乾燥保存など、後に部分的には食糧備蓄に成功したが）ほとんど考えられなかった。ストックが不可能なら、衣食住は軒並み「その日その日」のものにならざるをえない。

湿気は保存を困難にする。このことは同時に、そこに住まう者に仕事の継続を強いることになる。言い換えれば、横井は「モノ」を制作し続けねばならなかったのである。終戦から二十年後に（二人の仲間が他界し）単独生活を送ることになってから、忙しさは度を増していった。「何から何まで自分で作らねばならず、家の修理もせにやならず」、しかも「敵の気配に、つねに全神経を張りつめて油断なく身構えていた」ため、「物思いにふける余裕」など一切なかったという（横井1974: 212）。逆に、継続的な生産を停止することは、即座に「死」を意味することとなった。

道具という条件

言うまでもないことだが、何かを生産・加工するには道具が欠かせない。横井の生存を可能にした「モノ」もまた、道具なくして制作されなかっただろう。確認しておきたいのは、どのような種類の道具・キットを横井が確保していたのか、ということである。名古屋博物館のコレクションの分類をもとに整理しておこう。

小銃と手榴弾、それに草木を用いた自作品（衣服や魚取り籠など）



図3：食器、高5.5cm、長18.6cm、幅14.3cm、口径3.3cm、アルマイト製、蓋付き。名古屋博物館蔵（旧日本軍の水筒を改造したもの。口に竹棒を差し込むとフライパンになる）〔出典：『横井庄一生活資料（横井庄一さんのくらしの道具）』、2015年、18頁〕

を除く道具類は、おおまかに次の三つに分類できる。（一）持参あるいは拾得した既成品（ハサミ、スプーン、ナイフ、飯盒、水筒、ヤカンなど）、（二）既成品を一部改造したもの（水筒を切断して制作した食器兼フライパン、飯盒を改造した手提げ鍋など）、（三）拾得物から加工した道具（砲弾からできた鋏、葉莢からできた針や鑿）である。このうち（三）については次節で詳述しよう。たとえば、布裁ちに欠かせないハサミは最初から携帯していたと考えられる。針も同様だったが、潜伏生活の途中からは自作に切り替えたようだ。

ここで気づく

のは、どのキットにも、横井の手が加えられているということである。たとえば、（一）に分類されるヤカンには、複数の鋳掛の跡がある。また、真鍮製の水筒を真二つに切断することで

生みだされたのは、食器と（水筒口に棒を差し込んで）フライパンを兼ねるマルチユースの器である【図3】。このように、ひとつひとつのキットに手入れや工夫が行き届いているが、やはり最小限しか携行していなかったようである。この軽装備は当然、先に確認した「潜伏」と「湿気」という条件に見合ったものだが、たとえば地中を掘って住居を作るのにはまったく不向きであっただろう。穴掘りには自作の小さな鋤や硬質のレモンチンの木棒が用いられた。また、衣服制作のために、横井は原始的な織機を考案しているのだが、それについては第三章で詳述する。

材という条件

道具はまた、材料がなければ生産できない。グアム島で採取できそうな材料といえば、ヤシやパゴ、葦や竹といった自生の植物をイメージするかもしれない。実際それらは材となり、横井の暮らしを充実させたが、忘れてはならないもうひとつの材がある。終戦直前と思しき時期についての横井の証言に耳を傾けておこう。

皮のなめしを思いだったのは、みんなの軍靴が、はきっぱなしで油も何もつけない上、雨に濡れたり川の中も歩いたので、そろそろボロボロにいたみだし、さらに軍靴の底には鋳を打ち込んであるので歩くと大きい音がするし、足跡が残る不便もありました。

（…）それで靴づくりを試みようと思ったのです。

それで、方々から皮スリッパや天幕のズックなどを拾い集めてきて（つまりこの当時には、そこらを歩けば戦争中の物資の残骸がいくらでもあつて、「傍点引用者」、大概の物には不自由がなかったのです）、まず古い靴を分解して型をとり、その通りにズック地を裁つ〔横井 1974 : 8586〕。

ジャングルという言葉は「手つかずの自然」を連想させる。しかし戦後のグアムにそのイメージを当てはめることはできない。そうではなくむしろ「半壊した自然」を想像すべきであろう。もとより砲撃や空襲、火炎放射器などで自然は大いに傷ついていた。その一方で、兵士たちの遺留品や武器や薬莖、敵兵の缶詰や砲弾など、技術と人手があれば、新たな「モノ」を生むのに適した廃棄物が森に散在していたのである。

この廃棄物の利用法から、横井が「転用」ではなく、あくまで「加工」を重視したことを透かし見ることができる。つまり彼は、戦火を経たグアム島の半壊的自然を、「利用可能性をもつ材の集積体」として認識していた。逆に言えば、横井の思考は、レヴィ・ストロースのいう「ブリコラージュ」に相当するものではなかった。ブリコラージュは、周囲にある個々の事物の形態や特徴に人間の方が適応することを前提とする。言い換えれば、複数の事物を組み合わせ、

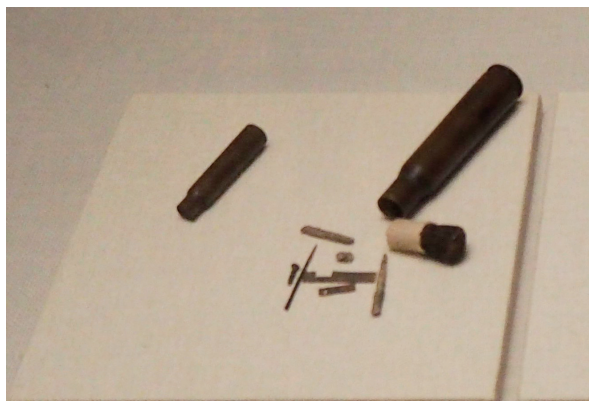


図4：薬莢、長 9.9-13.0cm、径 1.1-2.0cm。名古屋市博物館蔵（小さい薬莢は針の原材料になった。大きい薬莢には蓋をして小物の容器となった）（2018年5月 筆者撮影）

合成しながら、本来の意味や用途を換骨奪胎し、全く異なるものへと転用することである。

ここで参照すべきは、前節で紹介した（三）拾得物から加工した道具である【図4】。この場合、砲弾や薬莢はもはや原形を留めていない。つまり横井（とその仲間たち）は、それらをあくまで加熱し、叩き、鍛えるべき「原材」と認識していたのである。横井の制作は本来的に、プリコラージュの即興性を欠いている。どちらかといえば、計画や設計を重視する近代的な性格を有していたのである。

ゴムでの横井の暮らしはこのように、厳しい制約と特有のねじれの中で営まれていた。生の痕跡は能う限り消さねばならないが、そうでなくとも自然の力（湿気）は、痕跡はあらゆる必需品さえ腐らせてしまう。他方、利用可能な道

具や材はある程度入手できるものの、それを加工する技術や認識は、予想以上に近代的な思考の枠内にあった。少なくとも言えるのは、横井の知や技術を「勘」や「精神力」の次元に還元してしまうのは、大きな見当違いだ、ということである。

いずれにせよ、本章で検討した四つの条件は相互に結びつくことによって、横井がその都度対処せねばならない生活圏＝環境を形成していた。その基盤の上に、横井の衣食住が成立していたのである。なお、「食」は興味をそそるテーマではあるものの、本論では割愛せざるをえない。食は生存の絶対条件であり、横井の脳裏にもっとも強く刻まれてはいる。だが、食物がその都度消化され排泄される以上、横井の証言を除いて「食」そのものを客観的に記録する途は絶たれている。それとは反対に、「住」と「衣」は図面や実物で今に伝わっている。

第二章 家——地下住居と水洗トイレ

米軍のゴム上陸（一九四四年七月二日）により日本軍は壊滅的な打撃を受けた。生き残った日本軍兵士たちは、島の中央部のジャングルに身を潜め、抗戦を試みることになった。横井もそのうちの一人で、部隊解散後も、複数の仲間とともに潜伏生活を送った。

当初は、捕縛を免れるために移動を繰り返して、そのたびにピンロウやタコの大葉でランチョ（仮設小屋）を組んで暮らしていたが、潜伏が長期化するにつれ、一行は安住の場を地下に求めることになる。自然にできた洞穴は格好の隠れ場ではあるが、襲撃される可能性がきわめて高かった。かくして穴掘りは一九五〇年頃に開始された。

横井ケイブ

ここで検討するのは、横井が最後まで暮らした地下住居「横井ケイブ」である（ちなみに、現在観光地のひとつとなっている同名の地下住居は、横井の帰還後に別地に組まれた「レプリカ」である）。その制作過程を横井の言葉で振り返っておこう。

ともかく私は一人で穴を掘りだしました。竹ヤブを選んだのは諸条件のほかに、竹の根の広がり、千本の本以上にしっかりとしたものであったことが、特に大きな魅力になっていたと思います。その代りに掘るのが大変でした。十日もかかってやっと三メートルの深さまで掘り下げ、横に二メートル進んだ時に、二人は一晩手伝いに来てくれ、幅三メートル、高さ一・五メートル、奥行四メートルほどまでを志知が掘り、中畠は土を竹ヤブの傾斜面に積み上げてくれました。（…）

それ以後、こつこつと一人で、削ったり掘ったり、側面にいろいろや食器棚を置く場所、その突き当りに薪置場、空気孔を作り、また反対側の側面に川が近いからと試しに井戸を掘ってみると天の恵みか、きれいな水が湧き出し、これはなんともうれしいことでした。（…）

一応人間ひとりがか何とか住める穴にするまでには三ヵ月以上もかかりました〔横井 1974：189〕。

横井は、前章で紹介した鋤を棒先に結わえた即席のスコップで「ただただ根気」をもって穴を掘り進めた〔横井 1974：181〕。側面図で確認すると【図2】、横井の言葉通り、ケイブはL字型で傾斜のある竹ヤブの下、小川に向かって居住空間が広がっていることがわかる。そこには、食器棚やいろり、井戸など、簡素ではあるが台所が設えられていた。潜伏生活の最後の時期には、そこにムシロでできた簡素なベッドが加わることになる。

横井式水洗便所

とはいえ、三ヵ月ですべてが完成したわけではなかった。「土砂崩れと暑さ」、さらには「見ばえの悪さ」を懸念して、竹で柱、壁、天井を張る。「なんとか居心地よく暮らせるように、無い知恵を絞りましたので、この穴の完成までには優に五年はかかったのです」

（横井 1974：190）。それだけではない。夥しい湿気のため、すぐに竹の張替えなどのメンテナンスに迫られた。実際、横井の帰還後、（物見遊山の現地人に床板が持ち去られることがあったにせよ）ケイブは急速に荒廃し、崩れ去ったという。この事実は、仕事の「継続」こそが横井の生存を可能にした何よりの証左であろう。住まいとは、そこに生きる人がいてはじめて成り立つ営為なのである。

ここで注目しておくべき証言がある。ケイブ制作を、横井は「根気」や「無い知恵を絞った」といった語で表現している。さりげない言葉のようだが、この表現は、「建築（建設）」にまつわる知識を持ちあわせていなかったため、彼が現場での手探り、試行錯誤に頼らざるをえなかったことを意味している。だからこそ、次のように厠に水洗方式を導入したことが、いつそう奇妙に思えてくるのである。

便所の下を、空気孔をあける要領で突っついてゆくと二メートル半ほどで小川に通じるはずだと思い、その通りやってみて成功し、うまく排水口ができました。そのためには外側からみて流れ口が分からないように石を積み、タコの木を移植して偽装したりしました〔横井 1974：190〕。

もちろん、水の湧出という偶然があったにせよ、約五メートルの穴

を小川まで貫通させ、その中途に便所を設けることで、即席の下水処理装置を完成させている。この装置を制作者は「横井式水洗便所」と呼んだ。この工夫により、排泄物や汚物を「人知れず」川水に直接処理することが可能になった。ちなみに、かつて仲間と共同生活を送った地下住居は年に一度の汲み取り方式を採用していたという〔横井 1974：197〕。

この下水処理装置は、一見生活を便利にするようできて、新たな「家事」を居住者に課すことになった。下水管には時間の経過とともに詰まりが生ずる。それゆえ横井は台風豪雨のたびに下水管の掃除に勤しむ羽目になった。家政において、生活を便利にする道具は逆説的にも別の新たな仕事を生む——ルース・シュウォーツ・コーワンが指摘した、家事における近代化のパラドクスを横井も経験していたのではないだろうか〔コーワン 2010、フォーティ 2010：269-275〕。

水洗処理と豊橋の近代化

そもそもこの水洗方式を、いったいどうして横井は考案できたのだろうか。家についての乏しい知識のどこに、下水処理装置を着想する余地があったのか。もし仮に、幸運にも水源を発見できたとしても、多くの者は、その発見を「飲水の確保」と解するにとどまるのではないか。

しかも、日本国内で水洗式便所が本格的に普及し始めるのは、第二次大戦以後のことである〔藤田 2013〕。無論、横井がこの事実を知る由もない。ただし、出征前の経験と水洗式トイレ普及の歴史を照らし合わせてみると、偶然とは言い難いある一致を見出すことができる。

横井は仕立屋として独立する前に、愛知県豊橋市の「花井洋服店」で丁稚奉公を経験した（一九三〇—三六年）。当時豊橋には陸軍第十五師団が置かれ、軍都として栄えた。花井洋服店もまた軍部関係者を主な顧客とした。店は繁盛し、満州での出店を計画するほどだったという。

豊橋についてはもうひとつ注目すべき事実がある。それは、この軍都が地方都市として最初に下水処理施設の実用化にこぎつめたということだ。豊橋市史はそのことを次のように報告する。

下水処分場の建設は最新式の促進汚泥法で、一九三〇年に名古屋市が導入、東京は実験段階、大阪は建設中、京都は一九三四年に一部竣工で、国内でも数少ない汚水処分法であった。（…）

そして一九三五年、通水式がとりおこなわれた。この汚水処分場には、全国各地から施設見学者が数多く訪れるようになり、豊橋の都市近代化施策のひとつとして称賛された〔豊橋市 1987: 173-174〕。

豊橋が導入した「最新式の促進汚泥法」とは、イギリスの化学者、ギルバート・ジョン・ファウラー（Gilbert John Fowler 1868-1953）が考案した下水処理法で、集められた汚水を、酸化細菌を混ぜて空気を吹き込み攪拌することで浄化する新技術であった。興味深いのは、下水処分場の建設・完成時期と横井の豊橋での奉公時代が見事に符合する、ということである。しかも当時は職人仕事ではなく「外交」、すなわち営業活動に奔走していたという〔横井 1974: 9-10〕。横井は、豊橋で進んでいく近代化を目の当たりにし、新しさが生活にもたらす高揚感を肌で感じていたのではないか。

無論、この点について横井が何も述べていない以上、この解釈は仮説の域を出ない。しかも、この章で紹介したのは、あくまで下水処理施設であり、「横井ケイブ」に見られるような家庭内の下水管とは全く別次元の装置である。とはいえ、先駆的な施設を擁する地方都市、豊橋での実体験とはまったく無関係に、水洗方式が着想され、それが「横井式水洗便所」と命名されたと解釈することの方が、むしろ不自然ではないだろうか。思い出しておこう。本論文冒頭のセリフで指摘したとおり、横井は、自身の仕事とは直接接点のないことにも関心を寄せる、明敏な「記憶の人」だった。

この仮説は、次章で衣服を検討するうちにいつそう補強されるだろう。横井の「モノ」は単なる器用さの成果ではなく、ある種の歴

史性を帯びている。つまり、近代化の具体的成果を凝結したかのごとく、わたしたちに呈示するような側面を有しているのだ。

第三章 衣——パゴの繊維と国民服

前章では、横井の「モノ」が、(衣食住にまつわる) 現にあった課題に対する即時の問題解決の結果というだけではなく、内地での実験に基づく「記憶」と結びついていたことを強調した。本論文の「はじめに」で指摘しておいたように、「モノ」には二重の性格、すなわち問題解決に向けた有用性の次元と、それだけでは説明しきれない「記憶」の次元が備わっているのである。横井ケイブには、近代化に沸く名古屋や豊橋の記憶が内包されていた。

この章でも有用性と記憶というふたつの観点から、今度は横井自作の衣服について考察を進める。最初に、その制作に至るまでの過程を振り返っておこう。

衣服の製法

横井は、比較的早い段階で、布の制作に欠かせない繊維についてのヒントを、グアムの現地住民(チャモロ族)から得ていたようである。米軍上陸前(一九四四)に日本軍が防衛体制を整えるさなか、

彼は次のような光景を目にしている。

水牛の皮をなめすのを業とする現地人の家があり、私は興味を覚えて、その工程を眺めていました。タンニンとかいう木の皮を細かくきざんで水につけてアクを出しておき、そのアクの水に皮を二、三日ひたした上で蕃刀で皮から毛を削り落とし、さらに皮の裏側もまた蕃刀でこすってきれいにし、それを再び、タンニンのアクの水の中に一か月位つけておき、皮がしなやかに柔らかくなってから、縮まぬようなばして四方を釘でとめて、天日に干して乾かして仕上げるという方法でした。原始的なやり方なのでしょうが、後で私には大変、役に立つことになったのです〔横井 1974: 25〕。

何より重要な点は、衣服職人であった横井がことさら「材」について強い関心を寄せ、現地の人々の知恵に耳を傾けている点である。他にも、食用になる果実や植物(およびその調理法)について実地に学び、滑走路の建設にあたっては、「パゴの繊維で編んだ間に合わせのモッコ」で石を運んだという〔横井 1974: 31〕。また、先の引用にあった「皮なめし」を、横井も一度だけ試している。結果的には失敗で、ギンバエが群がって皮を腐らせてしまったものの、この手順は後で確認するパゴの繊維抽出法に応用されたと考えられる



図5：パゴの木、長 59.0cm、径 5.2cm

〔出典：『横井庄一生活資料（横井庄一さんのくらしの道具）』、2015 年、43 頁〕

〔横井 1974：85〕。現地で得た情報や伝聞は、「実践知」として横井の生存に貢献していたのだ。

ここで、一九五〇年頃から始まった、

横井が「本格的な織物生産」と誇らしげに語る、衣服制作の手順を確認しておく。作業は大きく三つの工程、すなわち

パゴからの繊維抽出、織布、縫製に分かれる。テイラー横井にとつて三番目の縫製は造作もないことだろうが、困難なのは前半の工程である。

パゴの木枝は一見したところ硬質丈夫で、繊維をとるには不向きに見える【図5】。しかしながら、横井は「パゴの木の皮をすうつ、すうつとはぐと綺麗にむける」こと、水にさらして粘り気を洗い、乾燥させると被服の修理に使えることを発見した〔横井 1974：15〕。つまり、現地で学習済みであった皮なめし——剥いだ皮を水で洗い、

天日干しする——の製法を繊維の抽出に応用したのである。ちなみに、（水浸や乾燥の時間を微調整して）この方法を納得のいくものにするのに十年を要したという。

では、第二の工程である織布はどうだろうか。先に答えを述べてしまうと、横井は原始的な織機による布制作に成功している。帰国後に横井本人が再現したレプリカ【図6】を見ながら、次の説明を理解するのがよいだろう。

まず幅二十センチ、丈三十センチほどの四角な枠ぐみを組み、パゴの皮をめくると現われる白い繊維、これはいくらでも薄くむけるのですが、それを虫くいのある表皮に近い部分は除いて、きれいなところのみを何枚にもむいて適当な幅に切り、さらに糸をなつて、枠の上から下へ、つまり縦糸として張りつめ、一方で横糸を縦糸の一本置きに上手に通していけるようなあぐり「揚繰り——引用者註」をこしらえました。そして横糸を通すことに竹べらで手元へキュッキュッと引き寄せます。引き寄せるのに相当力を入れなければならぬので、木枠の先の方は木の幹に推しつけ、一方は自分の腹で押すようにして両方から支えます〔横井 1974：155-156〕。

上述された時期にはまだ勘づいていないが、横井はこの十年後、さ



図6：織機（横井庄一による復元品）、長102.0cm 幅69.0cm ラワン・竹製、1983年（2018年5月 筆者撮影）

らに驚くべき繊維加工術に到達した。パゴに強い撚りを与えて縋う、つまり最初から糸状に加工するのではなく、【図6】にも見られるように）「繊維を大まかに、よりを加えるようにした糸で織る」ことによって、アク（ぬめり）の発生を抑え、布に伸縮性を与えることに成功したのである。

横井の繊維抽出法と自作織機は原始的ではあるが、たしかに制作の理に十分適うものであった。その適切さを裏づけるうえで、夫の抽象画家ヨーゼフ・アルバースとともにバウハウスに学んだテキスタイルデザイナー、アニ・アルバース（Anni Albers 1899-1994）の研究は参照に値する。

追憶の織機

アニは南米での現地調査を経て、織り方というものは何世紀も変わらない、

という揺るぎない確信を得ていた——「要するに化学繊維とその加工がどんどん進化するあいだに、織りのテクニクだけがぼつねんと取り残され、時代の流れに忘れ去られてきたのです」（アルバース 2016：23）。この指摘はまずもって、横井の繊維と織機の両方に符合する。つまり、パゴの繊維はグアムという環境から得られた新たな素材である一方、それを織る技術はあくまで従来通りの「原理」に見合ったものである。さらに本論にとって注目すべきは、このテーマを補強する具体例として、ペルーに古来伝わる「バックストラップ織り機」【図7】をアニが挙げていることである（アルバース 2016：76-79）。その図解はあたかも、「木枠を欠いた」横井手製の織機ではないか。違うのは織機の固定法だけで、ペルーのそれがバックストラップ方式——織師が腰のベルトを装着し、後ろに身体を倒すことで縦糸を張る——であるのに対して、横井のものは、木枠を木立と下腹部のあいだに挟み込んで、織面を安定させる方式であった。横井の織機は、織りの技術が普遍的であることを図らずも例証しているのだ。

ただし、このこと以上に重要なのは、横井式織機が幼少期の記憶を頼りに考案されたということだろう。それは、彼の母にまつわる記憶であった。

子供の頃、家に足ぶみのハタ織り道具があり、母親が夜なべに、

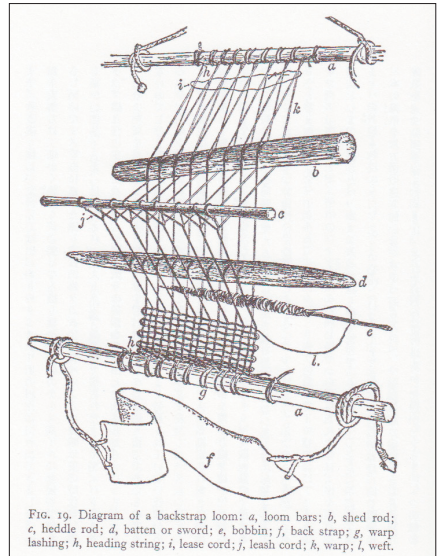


図7：ジュニアス・バードによるバックストラップ織り機の図解 (Junius Bird, *Andean Culture History*, New York, 1964, p. 18) [出典：アニ・アルバース『デザインについて パウハウスから生まれたものづくり』、白水社、2016年、77頁]

カタンコロン、カタンコロン、シュツシュツシュツと布地を織っていた薄らとした記憶から、足ぶみ機などとても考えつきませんが、「心道理は分かっていた」[横井 1974: 155]。

横井はきつと、母が足踏む織機の記憶をたぐり寄せ、そこに仕立屋修行の経験を重ね合わせることで、織りの「道理」（＝原理）を発見したのだろう。だとすれば、横井ケイブの水洗便所と同じく、内地の記憶、すなわち戦中期日本の「集合的記憶」が衣服にも宿っているのではないだろうか。この記憶の次元から横井の衣服を捉え返すとき、その形態、デザインが「軍服」、いや正確には「国民服」のそれにきわめて似ていることに気づかされる。



図8：国民服、『三越』、1940年12月 [出典：大丸弘、高橋晴子『日本人のすがたと暮らし 明治・大正・昭和前期の身装』、三元社、2016年、312頁]

国民服とは、日本政府が普及を目指した男子用の日本的洋装である。元々四種類が準備されていたが、一九四〇年十一月の「国民服令」によって二種類に定められた。ひとつが「従来の男子礼服、モーニング、フロックコート」に代わる「甲号」で、もうひとつが「平服」としての「乙号」である。特に普及したのは、【図8】の左上に見られる後者で、「町会役員とか警防団長、校長先生といった人前でしゃべる立場の人」が背広の代用品として好んで着用したという「大丸・高橋 2016: 311」。横井が自分のために作った洋服は、この「乙号」に酷似している。井上雅人の優れた国民服研究によると、一九四三年には「半袖半ズボン」のヴァージョンが「暑熱用国民服」として発表されたという [井上 2001: 56-53]。現存する横井



図9：パゴの繊維で作った長袖長ズボンの洋服、(上衣：丈73.6cm、衿63.5cm、袖口15.0cm。長ズボン：長96.0cm)〔出典：『横井庄一生活資料（横井庄一さんのくらしの道具）』、2015年、30頁〕



図10：パゴの繊維で作った半袖半ズボンの洋服、(上衣：丈前50.0cm、後84.5cm、衿25cm、袖丈21cm。半ズボン：長58.5cm、裾幅27.5cm)〔出典：『横井庄一生活資料（横井庄一さんのくらしの道具）』、2015年、31頁〕

の服にもまた、長袖と半袖という二つのヴァージョンがあるのは偶然だろうか【図9、10】。

横井自身、自作服の「デザイン」について詳しい証言を残していない（ちなみに、帰国直後は洋服店を再開する希望を抱いていたが、結果的に彼は、旧知の仲で陶芸家の鈴木青々（一九一四—一九〇）に学んだ作陶に専念している）〔横井2011〕。それゆえ、衣服のデザインについては現存品から推理を働かせるほかない。

襟と「作る喜び」

『明日への道』での衣服に関する記述と照らしあわせるとき、理解しがたいのは「襟」の存在である。というのも、一着の服を仕上

げるのに、以下のような途轍もない労苦が必要だったからである。

洋服作りを簡単に説明しておきますと、上下一着を作るのに大きなタオル程度の布が、表側に四枚、背中に二枚、両袖に四枚、襟が裏表で二枚、前に襟一枚、それに肩当てに一枚、合計十四、五枚を必要とし、一生懸命に根をつめておれば一ヵ月位で作れます。

しかし実際にはその間、食糧探しや炊事作業で時間を取りますので、仕上がるのには三ヵ月も四ヵ月もかかりました。

パゴの木を切って繊維を作るのに一ヵ月位、それを織上げて布にするのに三、四ヵ月、そしてそれを縫って洋服の上下に仕立て

るのに一カ月と、大変な苦勞の連続でしたが、一面、物を作つて、仕上げるという充実した喜び、「傍点引用者」が味わえました〔横井 1974 : 157〕。

証言によると、一着の洋服を仕上げるのにおよそ三カ月から半年を費やさねばならない。であればこそ、絶対に欠かせない部位とは言いがたい襟を省くという選択肢は考えられなかったのだろうか。横井の説明に即せば、襟がなければ布を「三枚」節約することができ。また、既述の通り、グアムは湿気がたちまちあらゆる物質を劣化させ、分解してしまうような環境であった。となれば、できるだけ工程とパーツの数を減らすのが得策であるはずだ。文字通り生存を賭けた横井の生活において、「襟」はややもすると、余分な装飾のように思えてしまうのである。

しかし実際には「襟」はそこにある——つまり横井は自身に妥協を許さなかった。というよりはむしろ、服のデザインは、横井にとつてもはや自明の理だったのではないか。前章で確認したとおり、丁稚時代に勤めた「花井洋服店」は実質的には「軍服専門店」であった。独立した名古屋で開業した後も、やはり師団を相手に商売したという。他方、一九三八年の一度目の召集から復員し、一九四一年、再召集されるまでの二年間は、「一般の洋服屋」に転じて、「入営服（召集者が入隊までに着用する洋服）」や「学校や役場の制服作り」

を主要な仕事にしたという〔横井 1974: 11-12〕。思い出して、この転業のタイミングは、まさしく「国民服令」（一九四〇年十一月）が公布された時期と合致し、顧客層も、指導的な立場にある「学校や役場」勤めの人々であった。だとすると、彼らが買い求めたのは「新調の」、「軍服に似ていたので、子供たちの眼には、晴れがましいもののようにつつた」国民服だった可能性はきわめて高い〔大丸・高橋 2016 : 311〕。横井はこの「国民服」の記憶に忠実だったのではないかと同時に、彼もまた洋装文化の普及に実地に貢献した仕立屋のひとりだったのではないかと。

本章で指摘した横井の衣服と国民服の関係性については議論の余地が残されている。たとえば、前掲の井上雅人の研究は、国民服誕生のプロセスやメディアによる普及活動とともに、同時代の女性のもんぺ、あるいはミシンによる家庭内での洋服の制作工程をも視野に収めることで、戦中から戦後にかけての日本服飾文化の襞を丹念に捉え直している。それに比べて、横井の衣服の形態にデザインが照射するのは、あくまで「男性」の軍事的身装文化のみである。横井の衣服は、その点において戦中期の服飾文化の一面のみを伝えるにすぎない。

ただし、より本質的だったのは、デザインそれ自体ではなく、デザインという行為が作り手に何をもたらしたか、という問題である。先の引用で述べられていたように、国民服に似たグアム島の洋服は、

横井に改めて「物を作って仕上げるという充実した喜び」を与えた。つまるところ、横井の生存はこの、作ることの充実感を支えとしていたのではないか。「作ることの充実感」は、井上の『洋服と日本人』の結論部に記された次の一節と共鳴しているように思われる——「日常生活の一環として、身近な能力として、デザインし、つくり出す行為はあらねばならない。そういった特殊な能力を、特定の人たちだけに預けてしまうことは、はなはだ危険なことである。現在の状況は、国民服や標準服が作られたときよりも、預けきってしまっている状況なのだ」〔井上 2001: 251-252〕。

おわりに——横井庄一と記憶の知

最後に、本論を通じて炙りだされてきた、横井庄一の意外とも言える一面に触れながら、議論を整理しておこう。

第一章で確認したのは、横井の生を条件づけた「環境」である。改めて強調したいのは、それが自然と人工、両方の側面を併せもっていたということである。そのダブルバインドのなかを横井は生き抜いた。とくに単独生活を送った最後の年月において、横井は生活の規模をできる限り縮小することに努めた。野生化した豚を狩ることも止め、沢で獲れるエビやウナギを細々と食し、家を直し、布を

織る——日々の家事のルーティンに徹している。現代風に言えば、横井は最終的に、一種の「ミニマリズム」「清貧の暮らしに到達した」とはいえ、この変化は短絡的に理解するべきではないだろう。それは、自然と共生した野生生活の極致でもなく、殻に閉じこもった消極的な姿勢でもない。繰り返し指摘してきたように、横井ケイブでの生活を死守するために、「その日その日」の家事は休む間もなく継続されていたのである。

こうした一連の事実を再確認していくと、横井の隠れた一面が浮かび上がってくる。一言で言ううとそれは、「近代人としての横井」である。彼は一貫して、近代的な知をもって困難と向き合い、生き延びようとしたのではあるまいか。仕立屋稼業で得た知恵、ゲーム現地人からの教え、試行錯誤の末見いだされた素材の性質など、横井は経験、観察、実験に基づく近代の実証的な知性を活用していた。『明日への道』に記された次の一節は、そのことを裏づけているように思われる。生存Ⅱサバイバルには行動と知の両方が不可欠なのである〔ダートネル 2018: 51〕。

結局、わたしにとって一番欲しかったのは、もう少し簡単にできる火起こし法と保存法、それと薬、草を判別し得る知識でした〔傍点引用者〕。

動物化するにつれて、嗅覚や聴覚は敏感になりますが、いろいろ

ろと種類のあった野草の中に、私が知らないだけで、薬になる草も、食用に適したものもたくさんあったと思います。しかしそこまで嗅ぎわける力を私は持ち得ませんでした〔横井 1974: 230〕。

本論文の冒頭に挙げた横井の発言に鑑みれば、新聞や講談本（横井の妻、横井美保子氏の証言によると、内地でよく読んだという）はもちろん、洋服に関する専門誌などに目を通していた可能性もあるかもしれない（横井庄一の読書経験というテーマはきわめて興味深い）、本人の証言がないため調査は困難である）。また横井が器用きわまりない手技の人であったことを思えば、ハンガリーの科学者、マイケル・ポランニーが示唆する「暗黙知 (tacit knowledge)」の沃野が横井のうちに広がっていると考えるべきなのかもしれない〔ポランニー 2003〕。ただそれは、一介の研究者が安易に足を踏み入れるべきではない領域である。

ともあれ、質素で薄汚れた横井の「モノ」を製法や着想にまで踏み込んで精査することによって、ようやく露わになるのは、歴史的に形成された彼の知のありようである。それをここでは「記憶の知」と呼んでおこう。

本論が試みたのは、いわば横井の「モノ」を介した物質文化の歴史学である。横井の制作物、とりわけその細部は、制作者本人が自明視してその根拠を問わなかった記憶の層を照らしてくれる。事実、

横井は衣服のデザインや下水管のアイデアの由来について、何も語ってはいない。横井に対する記述のなかで国民服との形態的同一性や最新鋭の下水処理法との同時代的連関はこれまで問われたことがなかった。本論では、遺された史料を手がかりに、この二つの要素の一致を見いだした。たしかに、論証の手だては「状況証拠」の積み重ねにすぎなかったかもしれない。しかし、第一章で確認した厳しい制約のある「環境」のもとで実現した家と衣についての考察は相互補完的に、以下の結論に説得力を与えてくれるだろう。横井の家も衣も近代化、もっと言えば日本の生活様式の「西洋化」という大きなうねりのなかに位置づけることができるのである。

横井庄一の「モノ」は、個の記憶を越えて集团的な記憶、物質文化の具体的な歴史の一層を指し示している。究極＝極限 (ultimate) の生産者にして消去者であった生還者 (survivor) は、共に帰還した「モノ」を介して、わたしたちに伝えている——現代人がとうに忘れてしまった暮らしの歴史を。戦時の真に具体的な記憶を。

参考文献

- アルバース 2016: アニ・アルバース『デザインについて バウハウスから生まれたものづくり』日高杏子訳、白水社、二〇一六年。
- 五十嵐 2012: 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰りし者たち』、筑摩書房、二〇一二年。

- 井上 2001：井上雅人『洋服と日本人 国民服というモード』、廣済堂出版、二〇〇一年。
- コーワン 2010：ルース・シュウォーツ・コーワン『お母さんは忙しくなるばかり 家事労働とテクノロジーの社会史』高橋雄造訳、法政大学出版局、二〇一〇年。
- 大磯 1972：大磯敏雄（国立栄養研究所長）「横井庄一氏に学ぶ」、『栄養学雑誌』、日本栄養改善学会、第三〇巻第五号、一九七二年、一八九・九〇頁。
- 大丸・高橋 2016：大丸弘、高橋晴子『日本人のすがたと暮らし 明治・大正・昭和前期の身装』、三元社、二〇一六年。
- ダートネル 2018：ルイス・ダートネル『この世界が消えたあとの科学文明のつくりかた』東郷えりか訳、河出書房新社、二〇一八年。
- 豊橋市 1987：豊橋市史編集委員会『豊橋市史 第四巻』、豊橋市、一九八七年。
- 名古屋市博物館 2015：横井庄一生活資料（横井庄一さんのくらしの道具①）、名古屋市博物館資料図版目録 10、名古屋市博物館、二〇一五年。
- 花森 1972：花森安治『踏みつけられた兵（インタビュー）』、朝日新聞朝刊、一九七二年一月二六日。
- 林 2012：林英一『残留日本兵 アジアに生きた一万人の戦後』、中央公論新社、二〇一二年。
- 林 2016：林英一「小野田寛郎と横井庄一 豊かな社会に出現した日本兵」、杉田敦（編）『つづむつと精神史 第6巻 日本列島改造—1970年代』、岩波書店、二〇一六年、二一七・二四三頁。
- フォーティ 2010：エイドリアン・フォーティ『欲望のオブジェ デザインと社会 1750年以後（新装版）』高島平吾訳、鹿島出版会、二〇一〇年。
- 藤田 2018：藤田昌雄『陸軍と厠 知られざる軍隊の衛生史』、潮書房光人新社、二〇一八年。
- ポランニー 2003：マイケル・ポランニー『暗黙知の次元』高橋勇夫訳、筑摩書房、二〇〇三年。
- 松本 1972：松本清張「ある兵士を支えたもの 戦陣訓と生への執着」、朝日新聞夕刊、一九七二年一月二二日。
- 山口 2007：山口誠『グアムと日本人 戦争を埋め立てた楽園』、岩波書店、二〇〇七年。
- 横井 1974：横井庄一『明日への道 全報告 グアム孤独の28年』、文藝春秋、一九七四年。
- 横井 2011：横井美保子『鎮魂の旅路 横井庄一の戦後を生きた妻の手記』、ホルス出版、二〇一一年。